

追憶『山の絵本』との出会い

koberyo1

人それぞれの生涯に三つの出会いがある、と先達から聞いたことがある。

その一つが、本との出会いである。

本との出会いについて回想する前に、わたしが目下、生を得て暮らしている「この国」について書いておきたい。というのも、この日本の国に生まれていなければ、『山の絵本』という、わたしに多大な影響を与えた奇跡的な本の素晴らしさについて、まったく理解できなかつただろう、と思われるからだ。

さて、実際、わたしはこの日本という国は恵まれていると思う。南北に長い島国である。山の風光は美しい。また四方を海にかこまれ、豊かな海の幸を獲ることもできる。春夏秋冬の違いも鮮やかだ。四季のめぐりの美は、人間性を涵養し、古来より独自の文化をはぐくんできた。

わたしは幼少の頃より書道にしたしみ、文字を書く大切さを骨身にしみて感じてきた。書の道とあるように、これはまた文字の大切さを知るための「道」なのだ。このように日本に伝わる「道」はじつに数多い。

茶道、華道などをはじめとし、香道、剣道、それから柔道があり、一々あげてゆけばキリがない。

そうしてこうした「道」の原点というか、その究極のはてにあるのが、日本人にとっての「神道」なのだろう。

神道とはだから宗教ではなく、わたしたちの所作や感覚の延長にあるものではないだろうか。

神社が大小問わず森や、森がなければ樹々とセットにしてあるように、それは自然への畏敬の念が「道」となり、形となってあらわれたものではないか、とわたしなどは思うのだ。

神道とはだから宗教ではない。がんらい神や自然に寄り添い、感謝する道なのだ。毎日が新しいことを有り難く受けとり、自然を敬う。苦境にあるときも手を合わせ、「ありがとうございます」と念じることなのだ。

感謝があればこそ前にすすむことができ、進化もする。やがて奮い立った心はみずからの足によって立ち、いきいきと生きる活力や、その術を身につけることができる。わたしはそう考えている。

わたしの生まれは青森県の弘前だ。弘前は雪国だが、岩木山に神が宿り、山容を仰ぎ見るだけで心に「祈り」が生じる。おのずと合掌したくなる。

わたしは郷里の青森を離れ、東京で育った。が、都会には都会の「人の生きる道」があることを知った。

というのも、わたしは都会の人々の支えをえて、齢九十となるこの年齢まで人間学を吸収しつつ、なんとか人生行路を歩みつづけることができた。

思えば中学に入り、友を得て、それから本を読むことを知った。岩波文庫の一つ★の本に始まり、夏目漱石を中心に乱読した。そのうちに正岡子規の俳句を知り、大自然のこと、日本に四季のめぐりのあることを考えた。

そんな或る日のことだ。詩人で随筆も数多く残した尾崎喜八という人物を知った。わたしが手にしたのは、昭和のはじめの時代、朋文堂発行の『山の絵本』なる本で、先にふれた詩人の尾崎がつづった書物である。

わたしはこの本の展開のスピーディーさに感心し、夢中になって読みすすめた。『山の絵本』とあるとおり、これは自然について書かれた本である。野鳥が好きで植物や昆虫も好きなわたしである。この本を読むことで触発されたのであろう。それら文章のひとくさりずつがしみじみ心に染み入った。

わたしの育った時代であるが、この本を手にしたのち、軍靴のひびきがいよいよ激しくなっていた。わたしは旧日本海軍の予科練の募集に応じ、横須賀で訓練を受けたのである。やがて戦争に紛れ、『山の絵本』は脳裏から消えていった。

ところが、今年に入ってからの四月の中旬頃だったと思う。長男から電話があり、「いまJRの六甲駅にいて、駅のコンコースに古本屋のワゴンが出ている」ということだった。さらに「父が欲しがっていた『山の絵本』の古本を見つけたから購入した」。それが電話の内容だった。

しばらくして本が届いた。わたしはうれしかった。わたしの手元に『山の絵本』が七十年ぶりに出現し、机の上に置かれたのだった。

その『山の絵本』はわたしが小さかった頃の古い版ではなく、1993年5月発行の岩波文庫であった。

この本の著者、尾崎喜八という詩人は、明治25年東京京橋の鉄砲洲の回漕店（かいそうてん。船問屋のこと）の長男として出生し、京華商業を卒業する。

家業を継がず、詩人として生きる。この詩人の特徴は、自然や山野等の風光への傾倒が強く、これらを素材として香り高い文章として発表し、当時の若者のこころを魅了し、捕らえて離さなかったのである。

人は読書という営為をつうじ、ものごとを比較し、考察し、新しい発見をし、事実の裏付けをする。読書によりインプットをおこない、素直なところで集中力をやしない、アウトプットする。『山の絵本』は、こうした基本的なことも教えてくれたのである。

岩波文庫の『山の絵本』の197ページに「一日秋川にてわが見たるもの」というテーマで、雑誌『山小屋』主催の秋川渓谷撮影競技会参加のようすなどが書かれている。

わたしも子どもだった当時、友人K君とつれだつて秋川渓谷沿いを歩き、秋川の源流を訪ねるといふ計画を立てた。ルートとしては、立川から五日市鉄道を利用する。しかし五日市線のどこで下車したか、いまとなつては記憶がない。

『山の絵本』から触発された、わたしの記憶をさらに語ることにしよう。

途中、秋川はその昔、土石流があったようで大きな石が川のなかにゴロゴロしており、そこに「黄セキレイ」が尾を振っていた。「背黒セキレイ」も飛びまわっていた。歩いていると川中が狭くなり、渓谷らしくなってきた。

溪流釣りができそうな場所も見かけたが、90分ぐらい歩いたところからは岩場がなくなり、カワガラスが「ビー」と啼きながら上流の方に飛んでいった。季節は初夏で、まだ蝉は鳴いていない時期だった。川ぞいの森には蝶が舞っているのを多くみた。暗い雑木林には、「ジャノメ蝶」が羽化したばかりなのか、多数みることができた。「ジャノメ蝶」は美しい蝶ではないが、丸い眼のような紋様が二枚の翅に描かれていて面白い、とおもったし、不思議の念にも打たれた。

上流に行くにつれ、川幅が狭くなってゆく。そうして大きな岩場をみることができた。それはそれは大きな岩がふたつ前途をさえぎるように立っていた。その登ろうとしても登れない大きさに自然の偉大さや神々しさを感じた。「神戸岩」と書いてカノト岩と読むらしい。まさしく神の扉、という印象だ。この岩の先は埼玉県である、と聞いた。

さて、東京の渋谷幡ヶ谷に父が家を建てた。昭和のはじめの時代である。そのとき、お祓いということで母が祈祷師を呼んで祝詞をあげてもらった。なんでもその人は占いもする人らしい。

その占い師は、わたしの顔をジロジロみながらいった。当時、わたしが十六歳くらいのときである。

占い師いわく、

「長男さんは（わたしのこと）、東京で一生の仕事を得るでしょう。しかし関西で仕事をするようになります。住居は西の方角。西へ西へと移りすむことになるでしょう。大病をすることになるけれど、長生きするでしょう」

ということだった。

わたしは当時、この占い師の言うことは信じていなかった。そして忘れていた。けれども長男が

入手した『山の絵本』がキッカケとなり、このことを思いだした。

先にも書いたが、わたしは巨岩を見て、その神々しさに打たれた。占い師が口にしたことはすべて実現し、いまわたしが居住しているのも「神戸」なのだ。

わたしはその頃、十六歳の少年だった。現在、かぞえ年で九十歳である。いまをさかのぼること七十四年前のできごとだが、その当時のことはわたしの頭のなかにありありと蘇ってくる。

神戸にすんでいることと、「神戸岩」との出会いとが不思議な符合となり、胸に迫ってくる。そうして人生とは偶然なのか、それとも必然の産物なのか、考えるよすがとなるのである。

長男が見つけてくれた『山の絵本』であるが、それはわたしの人生とも深く絡み合った稀有な一冊であることをつくづく思い知らされた。

いまなお『山の絵本』は、わたしの人生の物語に花を添えつつけている。まさに本もまた、人と同じように生き続けるのだな、と思いをあらたにした。